

リ  
セ  
ツ  
ト  
11

ルーナの守護者たち

風姫▶

◀水姫

▲焰王  
ディグルレーメ

シリウス▲

▲レグルス

▲カプリース

旅の道中で、  
ルーナたちが助けた  
女性。リカールで姉を  
探しているらしい。

クヌート ▲

フレイルの父親。  
レングランドの  
魔物研究所の職員で、  
今回ルーナの旅に  
同行している。

▲リュシオン(22歳)

クレセニアの王太子。  
強大な魔力を持つ魔法使い。  
魔法が使えない状態に  
なっていたが……

ルーナ(14歳) ▲

ちひさ  
千幸が転生した姿。  
リヒトルーチェ公爵令嬢。  
前世の記憶と強大な魔力を  
持ちつつ人生やり直し中。

◀フレイル(19歳)

魔法師団に所属してい  
る、精霊使いの少年。  
他人にはその力を秘密  
にしている。

▲カイン(20歳)

ルーナに助けられ、  
公爵家に身を寄せていた、  
エアデルト国の第二王子。  
現在はクレセニアに  
留学中。

千幸(享年18歳)▶

超不幸体質の女子高生。



## 第一章 逃亡者の行方

あなたなら、喪失の痛みを越えられますか？

「皆さん、どちらにおいでですか!？」

大きな声に続き、バタバタと騒々しい足音が響く。その騒ぎは、離れた部屋にいた三人の男女にも届いていた。

異国の生活習慣に則り、床に敷かれたラグに座っていた彼らは、一瞬で姿勢を正して顔を見合わせる。

「なんだ？」

「さあ、でもこちらに向かっているようですね」

三人のうちの一人、漆黒の髪と瑠璃色の瞳を持つ青年——リュシオンがつぶやいた。それに応えたのは、緩く波打つ金茶色の短髪に、珍しい青緑色の瞳をした青年——カインだ。

「何か問題でも起きたのかな？」

そう発しながら入り口へ目をやったのは、三人目の人物である少女——ルーナ。

麗しい顔を彩るのは、煌く銀髪。表情豊かな緑の瞳は、見る人の目を奪うのに十分だ。しかし今は、その瞳に不安の影がよぎっている。

そんな中、扉のない入り口に、ようやく騒動の原因とも言える人物が現れた。

「よかった……皆さんお揃いですね！」

ホッと息をついたのは、現在三人が滞在するカラデイ族の集落において、彼女たちの世話をしている青年——アディンだ。

よく日に焼けた健康そうな青年は、その人柄に見合った穏やかな顔立ちをしている。

彼の様子が深刻ではないことから、心配した事態ではないと察したカインは、緊張を解いて問いかけた。

「クヌートはいませんけどね。ところで、いったいどうしたんですか、アディン」

少しばかり含まれた呆れを感じとったのか、息を整えていたアディンはハッと我に返る。次いで、素早く姿勢を正した。

「す、すみません、つい！」

「それはいいから、何があったのか説明してくれ」

リュシオンは苦笑しながら謝罪を遮り、アディンに説明を促す。

「あ、はい。実は先ほど報せがきて、ようやく王都から兵士たちが到着したみたいなんです」

「そっか、兵士さんたちが……」

ルーナが納得したとばかりにつぶやくと、アディンは「そうなんです」と首肯する。

「それから、クヌートさんがいないのは把握しています。里の者とともに薬草を探しにいくと出掛けられたのを見えますから」

「そういうことか」

アディンの答えに、リュシオンはフツと口元を緩めた。

カラデイ族の集落に滞在している三人が、未だ帰路につけない理由。それは、先日討伐した山賊たちの処遇が決まっていないことと、唯一逃げ延びた首領がまだ捕縛されていないことにあった。

そして、おそらく首領が連れ去ったと思われる人質の救出も、理由の一つだ。

もともとは、生命を奪う禁呪をかけられたリュシオンを救うため、その手掛かりを求めて彼らはここリカール王国を訪れた。解呪することのできる禁呪使がいると考えたからだ。

しかし、少数民族の多く住む山岳地方に向かったルーナたちが目にしたのは、破壊しつくされたいくつもの無残な集落だった。

それを行ったのが件の山賊たちであり、さらにはその首領こそが、探していた禁呪使이었다のだ。

ルーナたちは、危機感を募らせたカラデイ族とともに山賊のアジトを急襲し、大半の者を討伐、捕縛することに成功する。

しかし悔しいことに、その首領だけには、まんまと逃亡されてしまった。

その際、首領は囚われていた女性を連れて逃げたということが発覚する。しかもそれが、リカール王国までルーナたちに同行した女性——カブリースの姉らしいということも。

そのせいで、カプリースは目に見えて憔悴しやうすいしてしまっていた。

ただ、不幸中の幸いだったのは、リュシオンにかけられた禁呪を解くことはできなかったものの、対処法が見つかったことだ。

魔法は、術者の魔力を糧かたに、魔法語マジックスベルというある種制御装置によって発動する。彼にかけられた禁呪は、魔法語を唱えられなくすることにより、その制御装置に不具合を生じさせて魔力暴走を体内で起こさせるといったものだった。

しかしリュシオンは、魔法語を介すことなく魔力を制御することで、禁呪による暴走を防ぐことに成功したのだ。

結果彼は、この世界でおそらく唯一、無詠唱で魔法を行使できるようになった。

だが、未だ禁呪が解かれていないことは確か。魔法が使えても、それがこの先彼にどんな影響を及ぼすかわからないため、解呪は必要だ。

そんな理由で彼女たちは、帰国するのを延期し、カラデイ族の集落に残っていたのだった。

山賊のアジトを急襲してから、二日。

その間に周囲の探索などももちろん行っているが、逃げた首領の行方ゆくえは杳やうとして知れなかった。一方、捕まえた山賊たちは、リカール王国の兵士に引き渡すため、小屋に閉じ込められている。

彼らによつて家族を殺された者は多く、感情に任せて山賊たちに危害を加えようと思う者もいる。それに共感できるにもかかわらず、引き渡すために守らなければならない者たちのストレスも相当なものだ。

そんな中、アデインのもたらした報せは、現状を変える吉報と言えた。

「これで問題が一つ減ったな」

「そうですね」

リュシオンとカインがうなずき合っていると、アデインが申し訳なきように口を挟む。

「それで、早速ですが王都から来た兵士の代表者の方が、皆さまにお会いしたいとのことですよ」

「会いたい……か……」

アデインの言葉に、リュシオンは難しい顔でつぶやいた。

山賊たちのことは、山岳地帯だけではなく、リカール王国に出入りする商人たちの噂にもなっていたくらいだ。

今回、そんな山賊たちがついに捕縛された。

しかし、本来であれば、その功績をあげるのは、自国の者であるのが望ましい。そもそも兵士たちが捕縛できなかった時点で、国の面子メンツはすでに潰れているのだ。

なればこそ、それを覆くはすほどの功績——逃げた首領の捕縛は、なんとしてでも自国の兵に実現してもらわなければならない。

そう考えれば、兵士たちの代表者はそれなりの身分の者である可能性が高い。討伐に協力していた他国の者を、身分のある代表者が牽制し、捕縛計画を主導する——そのような王国からの控えぬな圧力が加えられるのは容易に想像できた。

もともとそれ自体は、はじめから手柄を主張する気のないルーナたちには問題ではない。

では何が問題かといえば、やってきた代表者が身分ある者というのが、彼らにとっては厄介だった。

立ち居振る舞いから、三人が良家の子女であることは、カラデイ族の者たちにも察しがついているだろう。

とはいえ、大国の王子たちと、公爵令嬢だということまでは想像もしていないはずだ。

しかし、身分のある者——例えば、他国の貴族とも交流がある人物であれば、三人の素性に気づく可能性は高い。

「厄介だな……」

「けれど、僕たちが出て行かないというのはもつとまずいでしょね」

「だな」

リュシオンとカインは、アディンに聞こえないようにやり取りを続ける。そんな二人に、アディンは入り口に立ったまま首を傾げていた。

「あの……どうかされましたか？」

「ああ、すまない」

「悪かったね」

リュシオンとカインは口々に謝罪すると、お互いにうなずき合った。次いで、やり取りを見守っていたルーナへ声をかける。

「とりあえず、顔を出すとしよう」

「うん、わかった」

ルーナは首肯すると、アディンの方へと歩み寄った。

「アディンさん、案内お願いしますね」

「はい。では皆さん、ついてきてもらえますか？」

そう言っただけで廊下へと出たアディンに、リュシオンとカインも続く。

(できれば、問題ないといいんだけどな……)

リュシオンとカインの話し合いに参加はしなかったものの、彼らが何を憂うれいでいたかはルーナにも十分わかっていた。

(でも……なるようにしか、ならないよね)

開き直りとも言えるつぶやきを心の中で漏らし、ルーナはアディンたちの後を追ったのだった。

+

ルーナたちが、アディンに案内されて辿り着いたのは、里の中心部にある広場だった。

遠目から、十数人の武装した集団と、それを取り巻くように集落の民が集まっているのが見て取れた。

ルーナたちが近づくと、気づいた者たちがすぐに脇に退く。それに倣まがって、他の者たちも彼女たちに道を譲ったため、中心の集団へおのずと道が開けた。

「おう、貴殿らか」

ルーナたちが現れると、集団の中の一人が進み出る。

身長はリカール王国の男性平均より少し高いくらいだろうか。鍛え上げているのか、筋骨隆々と称するにふさわしい体型の男だ。

年齢は三十代前半から半ばといったところ。まだ若いながら、装飾の多さや素材の良さが際立つ装備から、彼がこの集団のリーダーであることが窺い知れた。

男の言葉に、リュシオンはわずかに目を眇める。

その仕草を見て、男はリュシオンが自分のことを知らない人間なのだと悟った。

「俺は、王都ゼノンから派遣された治安維持部隊の隊長、ガロン・レク・フリドだ」

身体に似合った大きな声で告げると、男——ガロンは、視線をリュシオン、カイン、ルーナへと順に移す。

その目がルーナを捉えた時、大きく見開かれた。それに気づいたリュシオンとカインが前に出て彼女を隠す。

ガロンは二人の様子により、自分の不調法に気づいた。それを誤魔化すように、彼は頭を掻いて言った。

「そう警戒するな。美しい少女だが、俺に成人前の娘をどうこうする趣味はない。こんなところに少女が同行していたので驚いただけだ。それより、貴殿たちで間違いないのか？ 例の件で大活躍だったと聞いたのだが」

おそらく、思った以上に若いルーナたちに驚いたのだろう。ガロンは、確認するように尋ねた。そんな彼を見て、カインは穏やかに口を開く。

「大活躍というのは大袈裟ですが、少しばかりの助力をしたのは僕たちで間違ありません」

「ほう……貴殿らのような若者が、助力ね」

ガロンは、カインの言葉に納得するどころか不信感を増したようだ。彼から、あからさまに疑うような発言が放たれる。

だが、リュシオンとカインは、不快な表情をすることもなく、ただ顔を見合わせただけだ。

「一応、二人共剣を嗜んでいるからな。それに、三人とも魔法が使えるから、それが大きかったんだらう」

リュシオンが淡々と告げると、ガロンは疑り深い表情を一変させた。

「なんと、貴殿らは魔法が使えるのか!!」

感嘆を隠さないガロンに、三人は苦笑するしかなかった。

魔法大国と呼ばれるクレセニアにおいても、魔法使いと認定されるほど魔力のある者は多くはない。だが、多少の事象を起こせる程度の魔力を持つ者であれば、それなりの人数がいる。

ゆえにクレセニア国民の大半は、魔法使いの数が多くないことは知っていても、珍しい存在だと認識していない。

けれど、その認識は他国——リカール王国のような場所では大きく異なる。魔法使いは稀少で、一目置かれる存在に他ならないのだ。

「なるほど、魔法使いか。ならば不思議ではないか」

ガロンは納得したとばかりに何度もうなずくと、改めて口を開く。

「よし、では場所を変えて詳しく話を聞かせてもらおうか。おい、どこかに話し合うに相応しい場所はないのか？」

周りを囲む里人に、ガロンが大きな声で問う。

すると、後ろから一人の老婆が進み出てきた。そちらに目をやったルーナは、その里人に呼びかける。

「あ、レトラさん」

彼女は、このカラデイ族の里における顔役の一人だ。

「案内が遅くなって申し訳ない。里長が待つておるから、ついてきてもらえるかの？」

レトラは、おっとりとした口調でガロンに尋ねる。

「ああ、ちょうど場所を移動したいと思つていたところだ。彼らも一緒に良いだろうな？」

「もちろんですとも。彼らは我が里だけではなく、この辺りの里すべてを救ってくれた人物なのだからの」

「ふむ。そのあたりも詳しく話してもらおう。だがそうだな、この人数で押し掛けるのは、そちらも困るだろう。メイとビハールは俺と来い。ほかの者はザズと共に待機しろ」

「了解」

「かしこまりました」

「わかった」

ガロンの指示に、すぐさま三人の男女が返答する。

そのうちの壮年の男性と、二十代半ばの女性はガロンの後ろに控えた。

一方もう一人の男性は、ガロンから離れていく。その彼に従い、残りの兵士たちもガロンと距離を取って待機した。

「ひとまず、あいつらを休ませてほしい」

ガロンが部下らを「瞥して言う」と、レトラはコクリとうなずいた。

「わかり申した。たいしたもてなしはできぬが、できる限りのことはしよう」

そう言ったレトラは、今度は周囲の里人に目をやる。

「聞いておったな？ そういうことじゃて、頼んだぞ」

「おまかせを、レトラ婆」

里人の一人が請け負うと、レトラは満足して視線をガロンに戻した。

「では客人、参ろうか」

「ああ、頼む」

レトラはガロンの返答で踵を返すと、年齢を感じさせないしっかりとした足取りで歩き出す。

「俺たちも行こう」

リュシオンに促され、ルーナとカインも後に続いた。

すでに数日里に滞在している三人は、レトラが進む方向から、目的地が里長の住まいだと見当が



つく。

里長の家は、集落の一番奥にあり、他の家々に比べると大きな造りになっていた。しばらく歩いたところで、予想通り里長の家に到着する。

入り口を潜るとすぐに土間になっており、端の方に竈などが置かれていた。

(様式はもちろん違うんだけど、土間に竈とか、古民家を彷彿とさせるよね)

そんな感想を抱きながら、ルーナはレトラについて奥へと向かう。

短い廊下を進むと、前方に一人の男性が立っていた。カラデイ族の里長、ドムだ。

「よく来てくれた、王都からの客人よ」

里長は、まずレトラに案内されてきた三人へ挨拶する。

王都ゼノンから派遣されてきたガロンたちだが、さほど遜る様子のない少数民族の長に対して、も不快な態度は見せなかった。

「俺はガロン。こっちは俺の補佐である、メイとビハールだ。まあ、詳しいことは落ち着いて話そうじゃないか」

「ああ、その通りだな。ではこちらに来てくれ。……おまえさんたちも」

里長は、口を挟むことなくやり取りを見守っていたルーナたちにも声をかける。それにうなずきで応え、全員が家の奥へと移動した。

辿り着いたのは、大きな広間だった。

ただし普通の広間とは違い、細い柱がいくつも立っている。おそらく、時にはここに布を張って

部屋を仕切るためだ。

板の間には、草を編んだラグが何枚か無造作に敷かれている。

里長は皆に座るよう促すと、ラグの一つに腰を下ろした。ガロンたちは、彼の向かいに座る。

ルーナたちは、少しだけ逡巡した後、ガロンたちの斜め向かいに当たる場所へ落ち着いた。

「では、改めて。よく参られたガロン殿」

「通報から遅くなってしまい、悪かったな」

「いやいや、できる限り急いで駆けつけていたのはわかっているとも」

「そう言ってもらえるなら、ありがたい」

ガロンは、里長の言葉に破顔した。

(このガロンって人は、それなりの身分がありそうだけど、偉ぶるところもないし、気さくな人柄なんだね)

里長とガロンのやりとりを見つめながら、ルーナはそんなことを思う。

そんな彼女の内心をよそに、里長たちは軽い雑談を終え、本題へと入った。

「それではまず、今回の事件のあらましと捕縛までを改めて語ってくれないか?」

「わかりました」

里長は了承すると、ここ数日に起こった事件について語り始める。

「——というわけで、生き残った山賊どもは、一か所に集めてある。奴らの首領を逃してしまったのは口惜しいが、今、全力でその行方を捜しているところだ」

里長が語り終えると、ガロンは重々しく口を開いた。

「なるほど……逃げた山賊の首領は魔法使いであったか……」

「しかも、かなりの手練れだったようだ」

「魔法使い、しかもそのような人物であるというなら、今までの捜索がすべて空振りに終わったのも納得できるな」

今回ほどではなかったものの、山賊の被害は過去にもあった。

当然ながら、皆が王都の兵士に助けを求めたのも、一度や二度ではない。もちろん訴えを受けて国も対策を取り、何度か山賊討伐隊が組まれている。

それでも、山賊を討伐することができなかったのだ。

その原因が、山賊の首領が魔法使いであったためとわかって納得はしたものの、だからと言って、今までの悔しさがなかったことになったわけではない。

「相手が魔法使いとはいえ、これまで仲間の山賊の捕縛さえ叶わなかったのは、我らの力不足と認めねばならんだろうな」

「ガロン様！」

「隊長！」

憎々しげに吐き捨てるガロンに対し、副官二人が諷めるように叫んだ。

たとえそれが事実であろうと、王都から派遣されてきたガロンが失態を認める発言をするのは問題だからだ。

「うるせえ！ くだらない体面がいい。事実俺たちが無能だったせいで、こちらの民の多くが被害にあったんだからな」

ガロンがそう吠えると、副官たちは声を詰まらせた。

彼らもまた、カラデイ族の里に辿り着くまでにいくつもの集落の悲惨な状況を目にしていたのだ。

「ガロン殿。先ほどの発言は聞かなかったことにする。だが、あの言葉が本心であるならば、逃げた首領をぜひとも捕まえてほしい」

そう言っつて、里長は視線をルーナたちに向けた。

体面を取り繕うのではない、ガロンの真摯な言葉。それゆえに里長の心に届き、ガロンの不利益になる発言をなかつたことにしたのだ。

「それで良いな」という彼の心の声に、ルーナたちは首肯して返す。

ガロンは苦笑すると、自分の頭を乱暴に掻いた。

「もちろん、先ほどの言葉に嘘はねえ。だからじゃねえが、里長の願い通り、首領は俺たちが絶対に捕まえてみせるぜ」

「期待させてもらう」

里長がニツと口角を上げると、ガロンも同じように不敵に笑ってみせる。

「どうやら今のやり取りで、お互いを気に入つたようだった。」

「さて、山賊たちの捕縛までの流れはだいたいわかったが、おまえたちが恩人という彼らについて、もう少し詳しく語ってもらおうか？」

ガロンはそう言うと、視線を里長からルーナたち三人に移す。

(ついに来た！ いろいろバレないといいんだけど……)

ルーナは、顔や態度には出さないように気をつけながらも、緊張に身を固くした。

「貴殿らは他国の貴族……あるいは豪商のような上流階級の間人だろう？ それがなんでリカールの、それも山岳地帯にいて、山賊退治にかかわっているんだ？ 貴殿らに得はないことを考えると大きな裏はないと思う……それでも悪いが、可能なら納得できる説明がほしいぜ」

尋問するような形となったことを申し訳なく思っているのか、ガロンの口調は歯切れが悪い。

ルーナは、両隣に座るリュシオンとカインにそっと目をやった。すると、同じく目を向けた二人と視線が合う。

(リュウ……カイン……)

戸惑う彼女をよそに二人はうなずき合うと、まずリュシオンが口を開いた。

「貴方の立場なら、疑問をそのままにしておけないのも仕方ないだろう」

「わかってくれてありがたい」

すかさず礼を述べるガロンに、リュシオンは少しだけ口元を緩める。

「察しの通り、俺たちは他国——クレセニアの貴族に連なる者だ。身分を証明するのは……そうだな、これを見てもらえばわかりやすいか？」

そう言っつてリュシオンは、懐から通行許可証を取り出した。

これは、ルーナの父——リヒトルーチェ公爵が発行した正式な通行許可証だ。もちろん名前前など

については微妙に変えている。

たとえばルーナの場合、本名のルーナレシア・リヒトルーチェではなく、ルーナ・フェルタンと書類に書かれているのだ。

フェルタンは彼女の父方祖母の生家であり、実在する家名である。きちんと存在するので、調べられても問題がない。

もちろんリュシオンとカインについても、それぞれファーストネームはそのままに、実在する家名が記されていた。

「ふむ、クレセニアの……」

許可証を見ながら、ガロンはつぶやく。

しかし、その家名に特にピンときた様子はなかった。

(おぼあ様のご実家、フェルトンの名を見ても反応がないし、他国の貴族にはあんまり詳しくないのかな?)

ルーナはガロンを見つめて、小さく首を傾げる。

彼女の祖母の生家、フェルタン家は辺境伯爵家であり、クレセニアでも歴史の古い名門だ。

辺境伯といえば侯爵家と同等に扱われるものだが、フェルタン家にいたつては公爵家さえ一目置くほどなのだ。

そんなクレセニアの名門、フェルトンの家名を目にしても、特に気にした様子もないガロン。

ルーナが推察する通り、他国の貴族に疎いのだろう。

そうであれば、リュシオンやカイン、ルーナの顔で本当の身分を察することは難しいと思われた。三人は、それを知って内心安堵する。

「貴殿らの素性についてはわかった。この許可証も正規のもので問題はない。だが、ここにいる理由についてまではわからんからな。話してもらってもよいか？」

ガロンに丁寧な口調で問われ、今度はカインが口を開く。

「僕たちがリカール王国、そしてこのカラディ族の里にやってきたのには、件の魔法使いが関係しています」

「山賊の首領が？」

ガロンは訝しげに尋ねた。

見るからに育ちの良い青年たちと少女。実際、本人たちからも、貴族に連なる者と聞いている。そんな出自の彼らと、山賊の首領が繋がらなかったのだろう。

「ええ。実は、我が家に伝わる家宝の一つを、奴が盗んでいったのです。それは、我が家で行う儀式に必須のもの。ゆえに賊を追ってこの国に来たというわけです。ただ、この話はどうかこの場だけに収めてほしいのですが」

カインがすらすらと答えれば、ガロンは納得したようにうなづく。

もちろん、盗まれた家宝などなく、真実はリュシオンにかけられた禁呪を解くことが旅の目的だ。しかし、本来の身分と同じく、それをたやすく話すことはできない。

ガロンに説明したのは、リュシオンとカインがあらかじめ考えていた話だった。

「なるほど、家宝か……」

身分ある家となれば、家宝の一つや二つあっても不思議ではない。また、その家宝を子々孫々に伝えていくことが、その家の誇りとも言われている。

貴族社会においては、没落の憂き目にあつて家宝を手放せば、とんでもない恥と噂されるほどだ。それは、盗難などによって奪われても同じことで、秘密裏に取り返そうというのはなんら不思議のない話だった。

「だが、件の首領が目的の人物で間違いないのか？」

ガロンは、難しい顔で問いかける。

目の前にいるリュシオンたちは、その通行許可証からもクレセニアの人間だとわかる。

他国の貴族の家宝を奪った賊となれば、まず疑うのは自国の犯罪者だろう。そもそも、クレセニアからリカール王国に行くだけで、半月ほどかかるのだ。

しかし、リュシオンたちは、犯人がこのリカール王国の人間である魔法使いだと確信している。その根拠にガロンが疑問を持つのも仕方がなかった。

「結論を述べるなら、件の首領が犯人で間違いない。奴は、魔法を使って盗みを働いたんだが、盗まれた家宝には特殊な魔法をかけてあった。簡単に言えば、一定距離ならば追跡できるというものだ。それによって、賊がすぐに国外に逃亡したことがわかった。途中で追えなくなったものの、リカール王国に入ったところまでは確認した」

「さらにリカールで、最近魔法使いがいる山賊団が暴れているという話を聞きましたから。山賊に

身をやつす魔法使いなど、かなり稀な存在。逃げた賊と結びつけるのは簡単です」

リュシオンの説明を引き取り、カインが続ける。

そんな二人に、ルーナは内心で舌を巻いていた。

（必要な設定だけ……うん、確かに必要なんだけど、それをこんなにすらすら本當っぽく言えちゃう二人って……。やっぱりそういう処世術って必要なのかな。それとも、二人とも元々そういう才能があるってこと？ やだ、ペテン師って言葉が頭に浮かんできたよ……）

二人が聞けばおおいに反論しそうだが、幸いにも彼らにルーナの心の声は届いていない。

（ペテン師……いやでも、お金巻き上げたりする必要はないよね。じゃあなんだろう？ ひよっとしてわたしが知らないだけで、色んな女の人を騙してるとか？）

リュシオンとカインが気づかり知らないところで、ルーナはとんでもない妄想を練り広げていた。そして、いつの間にかそれが事実のように思えてしまい、リュシオンとカインを半目で睨みつける。

一方、何故かルーナに睨まれることになったリュシオンとカインは、訳が分からないまま戸惑うばかりだ。

密かな三人のやり取りをよそに、ガロンは彼らの話ですべて納得したようだった。

「では、ここに滞在しているのも、家宝が見つからなかったためということか」

「ええ。どうやら逃げた首領が、それを持ち出したようです」

カインが答えると、ガロンは遠慮がちに訊いた。

「答えられるのならばでいいのだが、家宝というのはどんなものなんだ？」

「詳しくは説明できませんが、見た目は意匠の入った指輪です」

「指輪か。ならば簡単に持ち出せるのも納得だな」

「ええ。忌々しいことに」

「まったくだ」

ガロンは、カインに向かって大きくうなずいてみせる。

（指輪ね……確かに、この世界じゃ指輪をしている人はたくさんいるものね。特に魔法使いは魔道具や護符として身に着ける人も多いし。というか、本当に設定作りこんでるなあ……これからは二人の言うことを鵜呑みにするのやめた方がいいかも？）

ルーナの誤解がさらに深まったことも知らず、話は続く。

「……それで、まずは捕まえた山賊たちのことだが」

里長が口火を切ると、ガロンは連れてきた副官へ目配せをする。それに応えて女性の副官——メイが話し出した。

「今回は事が事だけに、機動力重視で先遣隊として我々が参りました。近日中には残りの者が来る手筈となっております。ですので、その者たちが捕まえた山賊を王都へ移送いたします」

「なるほど」

「後発隊は、休息を取ったらすぐに王都に戻ることにしている。迷惑はかけないつもりだが、多少の便宜は図ってもらえるとありがたい」

メイの説明を引き取ってガロンが言うと、里長は了承を示して首肯した。  
 「では、本題……逃げた魔法使いについてだが。あれから、何か手掛かりはあるのか？ あるならば教えてほしい」

「それが、今のところ行方<sup>ゆくえ</sup>についてはまったくわかっていないのだ」

ガロンの言葉に、里長は苦虫を噛み潰したような顔で告げる。

「まったくか……」

同じく難しい顔で、ガロンは独りごちた。

そんな中、リュシオンが口を開く。

「魔法使いは、〈転移〉によってあの場から消えた。〈転移門〉を使用したわけではないから、そう遠くに逃げたとは思えない。たとえ何度か〈転移〉を繰り返したとしても、馬で移動したのと同じくらいの距離のはずだ」

「ちょ、ちょっと待ってくれ」

話の途中で、ガロンが焦って口を挟む。

リュシオンが視線を向けると、彼は決まりが悪そうに頭を掻いた。

「話を遮<sup>さか</sup>って悪い。だがな、俺たちにとって魔法は身近なものじゃない。わかっているつもりで話しているようだが、もう少し詳しく説明してくれないか？」

ガロンの言葉に、リュシオンはお互いの常識の違いを理解する。

たとえ魔法が使えなくとも、魔法の知識がそれなりにあるクレセニア人とは違い、リカールの人

間にとって魔法は本当に一般的ではないのだ。

「ああ、悪かった。じゃあ、どのあたりの説明が足りないか教えてくれ」

「そうだな、まず〈転移〉についてだ。瞬間的に違う場所へ移動する魔法——ということでは合っているか？」

「ああ、その認識で間違いない」

「ただ、どのくらい移動できるかとはわからないな。さっきの話を聞く限りでは、あまり長距離ではないと見当がつくが」

「その通りだ」

リュシオンはうなずきながら、そういえばと考えを巡らせる。

（リカールには〈転移門〉すらなかったな。となれば、〈転移〉についての知識がないのも仕方ないのか）

「〈転移〉魔法は、多くの魔力を使う。一回の魔法で移動できるのは、最大で一里ほどの距離だ。

それも、一般的な魔法使いがその距離を〈転移〉すれば、休息を一日取らねばならないほど魔力を消耗する」

「では、何度も〈転移〉するというのは……」

「短い距離でならば可能だが、ある程度の距離を〈転移〉したとなれば無理だな」

リュシオンがそう結ぶと、ガロンは眉間に皺<sup>しわ</sup>を寄せて考え込む。

そんな中、それまで黙っていたルーナが、おずおずと口を開いた。

「あの魔法使いは、カプリースさんのお姉さんを一緒に連れて行つてるかもしれないです。だとしたら、余計に遠くまで逃げるのは無理ですよね」

「ん？ カプリース？ 姉？」

考え込んでいたガロンは、ルーナの言葉に反応する。

そこで里長やリュシオンたちは、ガロンにまだその話をしていなかったことに思い至った。

「カプリースというのは、彼らと同じく里に滞在している娘の名だ。薬師見習いということで、怪我人の世話をしてもらっている。彼女がカラディ族の里に来たのも、その姉を訪ねて向かった里が壊滅状態だったからだ。山賊討伐後、捕まっていた者たちの中に姉はいなかったが、他の者の証言から、彼女の姉だけが件の首領に連れて行かれたのではないかと推測したんだ」

里長の説明に、ガロンたちは顔を顰める。

山賊の首領に連れ去られたとなれば、ろくな扱いをされないであろうことは容易に想像できるからだ。

特に女性は、死にたくなるような目に遭う可能性がある。

「そうとなれば、なおさら早く捕まえねばならぬ」

「ええ」

ガロンのつぶやきに、女性として思うところがあるのだろう、メイは力強く同意した。

けれど、そんなガロンたちに、里長は躊躇いがちに告げる。

「ただ、こう言つてはなんだが、件の首領とカプリースの姉が一緒にいる確証はないのだ。証言し

た者も実際に見たわけではなく、いつの間にかいなくなっていたため、連れ去られたのだろうと言っているだけだからな」

「良い方向に考えれば、一人で逃げたということも考えられるわけか」

「ああ。だから首領の搜索を行う際、そのことも頭に入れておいてもらえるとありがたい」

里長が頭を下げると、ガロンはもちろんだと力強くうなずいた。

それから彼は、改めてルーナに顔を向ける。

「悪い、話がまた逸れてしまったが、お嬢さんはほかに何か言いたいことがあったんじゃないか？」意外なほど紳士的に訊かれ、ルーナはおずおずと口を開いた。

「さつき彼が言った通り、〈転移〉魔法は魔力の消耗が激しく、〈転移門〉のような大掛かりな仕掛けがなければ長距離の移動は不可能です。そう考えると、逃げた魔法使いはまだこの辺りにいると考えるのが普通なのですが……」

「二日経つても、まだ手掛かりすらないな」

ルーナの言葉を引き取り、里長がつぶやく。

そんな彼に同意しながら、ルーナは再度話し始めた。

「いくら搜索場所が広範囲といつても、搜索に参加しているのはこの辺りを庭のように知り尽くした人たちです。当然、隠れやすそうな場所なども知っていて、重点的に調べていると思います」

「ああ、その通りだ」

「それでふと思ったのですが、見つからないのではなく、見つけれられないのではないのでしょうか？」

「ん……どういふことだ？」

ルーナの言葉が理解できず、ガロンたちは首を傾げる。

しかし、リュシオンとカイン、そして里長は、彼女の言葉にハッと息を呑んだ。

「なるほど、〈幻惑〉か」

「どういうことだ？」

リュシオンのつぶやきに、ガロンが尋ねる。

「俺たちが急襲した山賊団のアジトの入り口にも、一見すると単なる山肌に見えるような魔法が施してあった。そうした魔法で、搜索の目を誤魔化していたとすればどうだ？」

「魔法は、そんなこともできるのか……」

驚くガロンに、今度はカインが告げた。

「それだけではありません。精神系の魔法で気を逸らすような仕掛けがあれば、怪しい場所に近づいたとしても、本人が気づくことなく離れるよう誘導されている可能性もあります」

「本来、そのような魔法は禁忌に触れるのだが、相手は倫理観も忌避感も持ち合わせていない魔法使いだ。使用に躊躇いはないだろう」

リュシオンは口には出さないものの、自分にかげられた禁呪を思い出したのだろう。苛立たしげに吐き捨てた。

「なるほど。だとすれば、未だ奴が逃げおせているのも合点がいく。しかし、そうなるかどうか……」

ガロンは途方に暮れて天井を仰ぎ見る。

自分の部隊は、自他共に認める優秀な集まりだ。それは胸を張って言えるが、今回に関しては手が悪かった。

少しばかり魔法の知識がある者くらいはいるものの、魔法が使える者となれば皆無なのだ。

(どうする？ 何か〈幻惑〉の魔法とやらを見破る方法があるのか？)

頭を悩ませるガロンだが、良い考えなど簡単に浮かぶはずもない。

単純に考えれば、カラデイ族の里長のように、魔法が使えるというルーナたちに頼ればいいのだろう。

だが、他国の者にそこまで借りを作ってしまうことの危うさ。また、リカール王国の軍人としての矜持が、彼女たちに協力を仰ぐことを邪魔していた。

そんな彼を慮ったのは、副官のメイだった。

「一つ教えてほしいのだが、〈幻惑〉の魔法というものは、私たちでも見破ることは可能だろうか？」

「いや、あれは無理だろう」

メイの質問に、ルーナたちが答える前に里長が断言する。

彼は山賊討伐でアジトに赴き、実際に〈幻惑〉の魔法がかけられていた入り口を見ているのだ。ルーナが突き止めなければ、まったく疑うことのない岩壁だった。

「無理なのですか……」



メイは明らかに沈んだ様子を見せる。

それでも、彼女もルーナたちに協力を要請することはしない。

「ガロン殿」

「うん？　なんだ？」

リュシオンから不意に声をかけられ、ガロンは戸惑いのまま答える。

「その件だが、俺たちに手伝わせてほしい」

「む……」

リュシオンの発言は、ガロンにとっては正直渡りに船だ。しかし、彼らは他国の人間。

山賊討伐でさえ過分な助力をもらっているのに、これ以上の借りはできれば作りたくないのが本心である。また、その申し出に裏がないのかも確信できなかったのだ。

それを感じ取ったのか、リュシオンはさらに言葉を尽くす。

「ガロン殿が戸惑うのも理解できる。だが、俺たちも単なる奉仕で協力を申し出ているわけじゃない。先ほど話したように、あの魔法使いにはこちらも用がある。そのために協力するのはやぶさかでないというだけだ」

「だが……」

心揺れながらも、決断しきれない様子ガロン。

リュシオンは、あと一押しと口を開いた。

「俺たちに借りを作ると考えているのなら、こちらの条件も呑んでほしいのだが」

「条件？」

「ああ。まず、俺たちがここにいる理由……盗まれた家宝については決して口外しないこと。それから、件の魔法使いを捕縛できたとして、俺たちが協力していたことは必要以上に口外しないです」

「そんなことが条件だと？」

ガロンは呆気にとられたように訊き返した。

家宝にまつわる口外無用については、家の恥となるためよくわかる。しかし、協力を申し出ておいて、その功績はいらぬというのは、ガロン側に有利すぎた。

逆に疑いを持たれてしまった様子に、リュシオンはカインと顔を見合わせて苦笑する。そしてカインが、ガロンの誤解を解くべく口を開いた。

「先ほど、我らの事情はお話ししました。失礼だが、相手が魔法使いとなれば、いかな精鋭とはいえども苦戦することは必至。その点、魔法に関してならば、我らが役に立つのは間違いないでしょう。それから、そちらに利があるばかりと思われているようですが、事が公になるのは当家の恥であり、失脚にも繋がりがかねない事態です。だからこそ、奴を捕らえるのは我らとしても最優先事項なのです。しかし、勝手の違う他国で我を通すのは、問題があるでしょう。それならば最初から共闘した方が動きやすくなるため、ありがたいと思っただけです」

「うむ……そう言われれば、こちらとしてもむしろありがたい申し出だ。実際のところ、相手が魔法使いでは、俺たちに不利なことは確かだからな」



「わかっていただけで良かった」

そうやってカインが柔らかく微笑むと、女性であるメイのみならず、ガロンとビハールまで一瞬目を奪われる。

(出た、悩殺スマイル！)

心の中でルーナが突っ込むが、当の本人には自覚がなさそうだ。

一方ガロンは、自分の醜態を誤魔化するように咳払いせきほちすると、早口で話し出す。

「では、貴殿らの『手伝い』についてだが」

「そうだな……首領の捜索に俺たちも同行しよう。〈幻惑〉については、彼女がいれば発見どころか解除も問題ない」

「このお嬢さんが……？」

リュシオンがルーナを指して言うと、ガロンは驚きに目を見開いた。

ルーナがリュシオンやカインの連れであるのは、ガロンももちろんわかっている。だが、本当にただの同行者であり、山賊の討伐にしても救護班的な意味で役に立ったのだろうと考えていたのだ。ガロンの思考を察したルーナたちは、ただ苦笑するしかない。

「魔法に関して、この中で一番役に立つのは彼女ですよ」

カインの言葉に、ガロンは再度驚きを見せる。

(リュウが万全だったら違うけどね。でも、無詠唱について今はまだ人に知らせるべきじゃないと思うし、こうしておくのがベストかな)

ルーナは心の中でつぶやくと、ガロンに向き直った。

「戦闘には自信がありませんので、そちらは皆さんにお任せしたいと思っています。逃げた魔法使いが〈幻惑〉を施した場所に身を潜めていた時は、わたしに任せてください。それと、〈結界〉が施してあっても何とかできると思います」

「下手な謙遜は、この場合では悪手だ。」

ルーナはしっかりとガロンと目を合わせて言い切る。

（本当なら、逃げた時から動きたかったんだもん。この機会を逃す手はないよね）  
すでに首領の逃亡から、二日が経っている。

当初は、彼女たちもその捜索に加わるつもりだった。

しかし、リュシオンの体調と、捜索隊の心情を考えて断念したのだ。

魔法使いの捜索には、カラディ族以外の部族も参加することになっている。山賊により身内が傷つけられ、気が立っている者たちの中に、よそ者であるルーナたちが入るのは、余計な刺激を与えてしまう懸念があった。

それでも二日が経ち、状況は変わりつつある。

その間に、ルーナたちが今回の山賊討伐に多大な貢献をし、攫われた人々を救ったことが広く知れ渡ったのだ。

今はもう、よそ者といえどもルーナたちを邪険にする者はいないはずだった。

けれど、ここはリカール王国。

王都から兵士が来て捜索に加わるとなれば、また事情は変わってくる。他国の人間であるルーナたちが動くことで、いらぬ腹を探られることにもなるからだ。

だが、王都からやってきたガロンが、ルーナたちに協力を要請するのであれば別だ。その申し出は、彼女たちにとって渡りに船と言える。

「彼女はレングランド学院に通う学生なんですよ。それも魔法素養の高い、優秀な。きっと役に立つてくれるはずですよ」

カインがさらに言うと、ガロンは「おっ」と小さく感嘆の声をあげた。

魔法事情に疎い彼でも、レングランド学院の名前は知っていたのだろう。学院に通う魔法使いの卵といえば、市井の魔法使いを凌ぐとも言われているのだ。

卒業後に国の魔法師団へ入団する者が多いという事実が、そのことを証明している。

「すまないお嬢さん。こちらでも認識を改めるべきだな。是非、協力を頼む」

ガロンはルーナに向き合うと、真摯な眼差しを向けた。

「あ、あの、さっきも言ったように、わたしたちの都合でもあるんですから、そこはお互い様という事で。こちらこそ、よろしくお願いします」

焦りながら言うルーナに、ガロンは目を細めた後、表情を改める。

「捜索は明日から始めようと思う。部隊を三つに分け、貴殿らと現地の者がそれぞれ加わる形にしようと思うが、構わないか？」

「こちらには構わない。俺とルーナ、カイン、そしてもう一人、一緒に来ているクヌートという人物

で三部隊に分かれよう」

「クヌートという者は、こちらにいないのか？」

ガロンの質問に、リュシオンが答えた。

「クヌートは怪我人のために薬草を探しに行っている。もうすぐ戻ると思うので、その時に紹介しよう」

「わかった。搜索する場所については、ドム殿の意見を聞こう」

「そうだな……」

里長は顎をさすりながら、懐から一枚の羊皮紙を取り出す。

それはこの周辺を大まかに記した地図だ。ルーナたちが王都で出会ったテッソにもらったものより大雑把だが、大体の地理は掴める。

「まずはこの辺りか。三隊に分かれるなら、ここどこ、そしてここだ。重点的に調べる点については部族の者に訊けばいい」

「なるほど。だが、結構離れているな……連絡をどうするか……」

ガロンが考え込むと、ルーナがおずおずと意見を述べた。

「あの、わたしたちはそれぞれ、〈通信〉の魔道具を持っています。それで連絡を取ればいいんじゃないでしょうか？」

「おお！ 魔道具か!! それはいいな」

ガロンは興奮気味に声をあげる。

ルーナは知らないことだが、すでにクレセニアではかなり普及した〈通信〉の魔道具でさえ、まだ珍しい国は多いのだ。

ここリカールでも、十分普及しているとは言えない状況のため、ガロンが興奮するのも無理のないことだった。

「情けないことだが、貴殿らには感謝しかないな」

いろいろな部分でルーナたちの力を借りることになり、ガロンは自嘲する。

そんな彼に、リュシオンは首を横に振って告げた。

「たまたま、魔法という俺たちが役に立つ理由があっただけのこと。どちらか一方ではなく、双方の協力が必要なんだ。借りと考えるのはやめよう」

「そうだな……」

ガロンはうなずくと、リュシオンに向けて手を差し出した。その手を、リュシオンは不敵な笑顔と共に固く握ったのだった。

十

明日の搜索についての話もまとめ、ルーナたちは、ガロン一行と共に里長の家を出た。

カラデイ族の里に宿はなく、ガロンたちは村の広場や周辺で野営をすることになっている。

普段であれば、幹部だけは里長の家などに滞在するのだが、今は他の部族の者や怪我人が滞在し

ているため、そのような方針にしたのだ。

里長の家でのやり取りで、それぞれ打ち解けたルーナたちとガロンたち。

道すがら、穏やかに他愛ない話をしながら歩みを進めていた。

「レングランド学院というのは、それほど様々な学問が学べるのですね」

「はい。やはり魔法関係の授業が有名ですし、人気もありますけどね」

「確かに。私もレングランドといえば魔法を学ぶというイメージが強いですね」

「そうだな。俺もいわゆる魔法使い養成学校だと思っていた」

ルーナとメイの会話に、ガロンが好奇心を隠せぬ様子で入ってくる。

レングランド学院という存在は知っていても、やはり魔法を学ぶ場所という認識が強いのだ。

ルーナが語る、授業内容や日常風景、そして隣接する研究所など、ガロンたちにとって興味深いものだった。

「それに、貴族以外の学生がそんなにいることも驚きました」

さらにメイが言うと、ガロンやビハールがコクコクとうなずいている。

「在学中は、身分関係なく一緒に学びますから」

「それで採めないのか？」

ガロンの質問に、リュシオンが答えた。

「選民意識の強い人間がいなくてもないが、差別をすれば貴族の子女といえど処分を受けることになる」

「なるほど。しかし、学び舎か……」

ガロンのつぶやきに、メイが苦笑交じりで説明する。

「リカールでは、学校というものが厳密にはありません。家庭教師に学ぶ者も、上流階級の人間がほとんどです。特にこうした山間の部族だと、なおさら教育の機会が少ないのです」

「リカールはまだ新しい国だからな。だが、貴殿らの話によって、教育の大切さがよくわかった。

この国でも、そうした意識を改革したいものだな」

「そうですね」

メイは、ガロンの言葉に深く同意した。

「だが、そもそも教育を施す人間が不足しているからな」

「なるほど。でも、人材はこれから増やしていきますし、いつかこの国にも学校ができるといいですね」

「ああ。嬢ちゃんの言う通り、目指す価値はあるな」

ガロンたちの決意に、ルーナたちは顔を見合わせて笑う。すると、リュシオンが彼らに提案した。

「レングランドでは、他国の留学生も受け入れている。そうした制度を利用して、まずは教師を育成していくのがいんじゃないか？」

「なるほど！ それはいい考えだな」

ガロンは手を打つと、名案だとばかりに何度もうなずいている。

（こんなところで、両国の新しい交流が生まれるかもなんて、ちよつと素敵だよね）

ルーナはそんなことを思いつつ、穏やかな笑みを浮かべる。

そうして彼らが、話を続けながら広場に近づいた頃、事件は起こった。

「キヤー！」

突然、響き渡った悲鳴に、ルーナたち一行は思わず足を止める。

そんな彼らの耳に、続いて新たな悲鳴や、男たちのざわめく声が届いた。

「何事だ？」

リュシオンとカインは、顔を見合わせると同時に走り出す。それに負けず劣らずの速さで、ガロンも後に続いた。

「わたしたちも行きましょう！」

ルーナは、メイと後方を歩くビハールに言うと、騒ぎのする方へと走り出した。

騒ぎの現場は里の中心にある広場だった。

辺りには人垣ができていて、何が起こっているかはわからない。ざわめきの中、一際興奮した声が聞こえてきた。

「この無礼者が！」

「どっちがよ!?」

「なんだと、この私にそのような口を利用してタダで済むと思っているのか!」

「待ってください! カプリースさん、黙って!」

「だって、この男が!」

「いいから、黙って!」

(え? カプリースさん? それにあの声はアインさん!?)

どうやら騒ぎの中心はカプリースであると知り、ルーナは集まった群衆を掻き分けて進む。

何とか人垣を抜けると、予想通りカプリースとアイン、そしてガロンと一緒に来た兵士たちがいた。

見たところ、カプリースとアインの二人が、兵士たちと相對しているようだ。

「おい、何事だこれは!」

緊張した空気を破ったのは、ガロンの大きな声だった。

それと同時に、彼の登場を知ったのだろう、兵士たちがガロンを見て姿勢を正した。

そんな中、カプリースの正面に立っている男だけはカプリースたちを睨みつけている。

「ザズ! これはいったいどういうことだ!」

ガロンはさらに声をあげ、カプリースを睨みつけるザズの真正面に立った。

「どういふも何も、この生意気な女を処刑しようと思っただころですよ!」

「処刑だと!」

悪びれもせず言うザズに、ガロンは驚愕を隠せない。

ザズの方は、その言葉に嘘はないと示すように、片手を腰の剣に添えていた。

(処刑? いったいカプリースさんが何をしたというの?)

ルーナは嘩然としつつ、カプリースに目をやる。彼女はといえば、後ろからアデインに羽交い締めにされ、口を押さえられていた。

「どうやら、ザズの言葉に抗議しようとしているカプリースを、アデインが止めているらしい。それがわかったのだから、ガロンはアデインに声をかける。」

「離してやれ」

「ですが……」

躊躇うアデインに、ガロンは再度声をかける。

「良い。言い分を聞こう」

ガロンの言葉に、頭に血が上っていたカプリースも落ち着いたようだ。

彼女から暴れる気配が消えたのを見て、アデインは押さえ込んでいた手を離す。

「どうやら、あなたの方は話がわかるようね」

カプリースが嫌味っぽく言うと、途端ザズが気色ぼんだ。

「このっ……」

「おまえは黙ってる、ザズ」

声をあげようとしたザズをすかさず制し、ガロンはカプリースに尋ねる。

「そちらの言い分を聞こうか？」

「もちろんだわ。あたしは何も悪いことなんてしてないもの。その男が人のことを遊び女扱いしで連れて行くとしたから、手を振り払ってやっただけよ！」

「この売女が！ 嘘を吐くな」

「なんですって！」

ザズの暴言に、カプリースは眉を吊り上げる。

カプリースもザズも、自分の正当性を主張し、一步も引く様子はない。

埒が明かない状況の中、ガロンは遠巻きに見ていた兵士たちに目をやった。

「何があつたか話せ。決して嘘は交えるな」

ガロンの厳しい眼差しを受け、兵士はコクコクとうなずきながら話し出す。

「宿営の準備をしていたところ、そこのご婦人が通りかかりまして……その……ザズ副隊長が彼女にちよっかいを……」

いくらガロンに強制されたとはいえ、上司を告発することになり決まりが悪かったのだろう。

兵士は、歯切れ悪く事の次第を報告した。

「ザズ、おまえという奴は……」

唸るような低い声を絞り出し、ガロンはザズを睨みつける。それを目にしたザズは、一瞬怯んだものの、すぐに開き直って言った。

「ふん、このような田舎娘。私のような身分ある者が一夜の寵を与えてやるというのだ。感謝こそすれ、こんな反抗的な……」

「ザズー！」

ガロンの怒声に、ザズは途端に口を噤む。

(なに、あの人。最悪じゃない)

やり取りを遠巻きに見ていたルーナは、呆れを隠さず思う。

クレセニアの貴族社会で生きる彼女は、身分によって自分が神であるかのように錯覚する者がいることはよく知っている。

しかし、王都から来た兵士たちの隊長であるガロンは、一番身分が上であるにもかかわらず、それにこだわらない気さくな人物だ。

その部下であるメイとビハールも同じ態度だったため、まさかザズのような人物がいるとは思ってもみなかったのだ。

「いい加減にしろ！ 助けに来たはずの場所で迷惑をかけるとは何事だ！」

「そうですよ。助けに来てやったんだから、少しくらい我らに協力すべきでしょう。こんな田舎部族の娘じゃ、作法も知らないでしょうが、そのへんは目を瞑ってやるのに」

「ザズ、貴様……」

怒り心頭のガロンに気づかないのか、へらへらと嘯くザズ。

次の瞬間、ザズの頬にガロンの拳が決まっていた。

「ぐっ……な、何を！」

「わからないのか？ そんなこともわからない人間など、俺の部隊にはいらん！ 後発隊が到着したら一緒に去れ！」

「な、この私に……王の氏族に繋がるこの、ギーズ・ザズによくもこのような屈辱を与えてくれた

な！ 貴様後悔するぞ」

「ハッ、すでに後悔しているぜ。お前を部隊に加えたことにな。おい、こいつを天幕に監禁しとけ。決して外に出すんじゃねえぞ」

「わ、わかりました」

呆然としていた兵士たちが、ガロンの怒声で動き出す。

「くそ、触るな！ ガロンめ、許さぬぞ」

兵士に両腕を取られて拘束されたザズは、憎悪を込めた眼差しでガロンを見ながら喚きたてる。そんな彼を、ガロンは冷めた目で見返した。

「許さなくて結構。だがいいか？ 許可なく天幕を出るようならば、罪人として問答無用で斬る。

なあに、言い訳などいくらでもある。家人には勇敢にも山賊と戦ったゆえの最期だったと、しっかりと報告してやるさ」

ガロンの言葉が単なる脅しではないと、ザズもわかったのだろう。一瞬にして顔色を青くすると、それ以降は何も言わず兵士に連行されていった。

「ふう……」

大きなため息をつき、ガロンは肩を竦める。

そして、一連のやり取りに呆然としているカプリースを見た。

「すまなかったな、お嬢さん」

「え、あ……わかつてくれたなら」



謝罪の言葉を述べるガロンに、カプリースは戸惑いながら答える。

その横ではアディンが、あからさまにホッと息を吐いていた。

「カプリースさん！ アディンさん！」

二人の名を呼び、ルーナが近づくと、アディンが硬い笑みを浮かべる。

「大丈夫ですか？」

ルーナが尋ねると、カプリースは先ほどまでの怒りが蘇ったのか、早口で捲し立てた。

「まったく、このあたしに枷をしるとか、なんなのあの男は！ 身分を笠に着るわ、怯まないでくれれば今度は刃物を抜くわ。あんなのが本当に国から派遣された兵士なのかしら。そんなんだから、山賊すら捕まえられないのよ！」

「ちよ、カプリースさん！」

ザズのせいとはいえ、他の兵士たちをも貶める発言はいただけくない。

顔を青くしたアディンは、なおも続けようとするカプリースを必死で宥める。そんな二人に、ガ

ロンが口を開く。

「確かに罵られても仕方ないことをあの男はした。だが、他の兵士まで同じように見るのはやめてくれないか？」

脅すわけでも、卑屈になるでもなく淡々と告げられ、カプリースも冷静になったようだった。

「……そうね、悪かったわ。あなたは斬られそうになってたあたしを助けてくれたものね」

「そう言ってもらえるなら、ありがたい限りだ」

二人の間の空気が緩んだところで、ルーナはカプリースに改めて尋ねる。

「カプリースさん、怪我とかは？」

一見すると、彼女に着衣の乱れや怪我はない。だが、目立たないだけという可能性もあるため、ルーナは心配そうにカプリースを見つめた。

そんなルーナに気づいたカプリースは、ふっと笑ってみせる。

「腕を掴まれただけよ。なんともないわ」

「よかった」

心から安堵した様子のルーナに、カプリースは複雑そうに顔を顰めた。

(この子、本当にあたしのこと心配してくれたんだ……)

これまでの自分の態度は、ルーナに対して決して良いものではなかった。それでも、こうして心配してくれる彼女に、自分の嫌な面を思い知らされた気がしたのだ。

黙り込んで俯くカプリースの顔を、ルーナはなおも心配そうに覗き込む。その時、リュシオンとカインが近づいて来た。

様子を見守ってはいたものの、ひとまずはガロンに任せて口出しは控えていたらしい。

「大丈夫か？」

リュシオンが尋ねると、カプリースはハッと顔を上げた。

「リュ、リュシオンさん！ 怖かった！」

一瞬にして涙目になり、リュシオンへ両手を伸ばしてきたカプリース。ある意味、いつもの様子

に戻ったのを見て、ルーナは逆に安堵した。

(この様子なら、そんなに酷い目には遭ってなかったみたいだね)

彼女と同じことを思ったのだろう。リュシオンとカインは顔を見合わせて苦笑すると、伸ばされた手は取らずに言った。

「まあ、大丈夫そうだな」

「そんなことないわ！ すごく怖かったのよ！」

呆れたように肩を竦めるリュシオンに、カプリースは抗議の声をあげる。

しかし、彼女の思惑とは反対に、その言動が余計に『問題ない』印象を周囲に与えてしまっていたのだ。

憤慨するカプリースから視線を移し、カインがガロンに尋ねる。

「それにしても、いいんですか？」

先ほどの言い草を聞いている限り、ザズはなかなか厄介な背景を持っているようだ。上司とはいえ、それなりの処罰をすればなんらかの問題が起きるのではないかと思われる。

心配そうなカインに、ガロンは苦笑しながら告げた。

「ま、大丈夫だろ」

軽く言った後、ガロンはルーナたちに説明する。

「他の国、あんたたちのクレセニアとは違い、リカールはもともと多数の部族が集まってできた国だ。最初の王は最大の勢力を誇る部族の長だった。今でも、五氏族の長会が政治を司っているわ

けだが、王の氏族にはそれを笠に着る者がいてな……ザズはその典型みたいな奴だ」

「なるほど、あの人が言っていたのはそういう事情ですか」

「ああ。ぶっちゃけ、他でも似たような問題を起こしているな。それで俺のところに戻りこまれたんだよ。もともと本人にその意識はないが」

ガロンは肩を落とすと、大きく息を吐いた。

「だが、そうは言っても、やはり貴殿が咎められるのではないか？」

今度はリュシオンが訊くと、ガロンは疲れたように笑ってみせる。

「まあ、こう見えて俺もそここの氏族の出なんだな。そう簡単に咎められはしないさ。それに、あれと違って、陛下はよくできた方だしな」

「そうか……」

リュシオンはうなずくと、今度はカプリースに向き直った。

「あまり無茶はするな」

「そんなこと言ったって……じゃあ、黙って連れて行かれていうの？」

彼の物言いがショックだったのか、カプリースは泣きそうな顔で抗議する。だがリュシオンは、それに怯むことなく返した。

「そうは言っていない。だが、無闇に相手を挑発するのは危険だ。あの時、ガロン殿がいなければ斬り捨てられていたかもしれない」

「だって……」

まだ納得がいかない様子のカプリースに、リュシオンは短く告げた。

「斬られていたのは、アディンだ」

「え？」

意外な言葉に、カプリースは呆然として固まる。

そんな彼女を見て、リュシオンは肩を竦めた。

「気づいてなかったのか？ 彼が君を必死で守っていたことに。君が斬りかかれていたら、彼が庇<sup>かば</sup>っただろう」

(そういえば……)

ルーナは先ほどの一幕を思い出す。

カプリースを必死で止めていたアディン。彼が止めていなければ、カプリースはもつとザズを逆上させていたかもしれない。

それに彼は、カプリースを押さえ込みつつも、視線はじつとザズを捉<sup>とら</sup>えていた。

おそらくそれは、ザズが暴拳に出た時、カプリースを守るためだったのだ。

カプリースも、遅まきながらその事実気づいたらしい。項<sup>うなだ</sup>垂れた彼女の肩を、アディンが心配そうに支えている。

(アディンさん、きつとカプリースさんのことが好きなんだね。でも、カプリースさんは相変わらずリュウやカインが気になるみたいだし……うーん、うまくいかないものだね)

ルーナは、身近な恋愛模様に複雑な思いを抱いたのだった。

## 第二章 古<sup>いにしえ</sup>の祭祀<sup>レイタ・ロナ</sup>場

曇<sup>どん</sup>天の空から、願いむなしく降り出した雨。

「降<sup>ふ</sup>ってきやがったか……」

顔にかかった雨を拭<sup>ぬぐ</sup>いながら、ガロンが忌<sup>いま</sup>々しげにつぶやいた。

逃亡した山賊の首領——その搜索を予定してはいたが、生憎<sup>あいにく</sup>の天気までは予想しきれなかったのだ。

それでも、雨天中止などできるはずもなく、雨の中搜索が開始される。

「ルーナさん」

不意に名前を呼ばれ、ルーナは反射的に振り返った。

そこにいたのはクヌートだ。フード付きのコートを着た彼は、いつもと同じ穏やかな笑みを浮かべていた。

「どうしたんですか？」

「これを渡しておこうと思ひまして」

そう言っただけは、小さな容器を手のひらにのせて差し出した。

「これは？」